

## 発表 イギリス経験論への濱田義文の関心

荻間, 寅男 / Ogima, Torao

---

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

89

(発行年 / Year)

2006-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007916>

濱田義文先生追悼シンポジウム 発表

# イギリス経験論への濱田義文の関心

萩間 寅男

初めに、イギリス経験論への濱田義文先生（以下敬称略す）の関心という主題は、濱田の主な関心が倫理的思想にあるため、濱田のいう「イギリス道徳哲学」ないしは「イギリスのモラリストたち」に対しての関心と読み替えて以下の報告を進めることをご了解頂きたい。

—

濱田のイギリス道徳哲学への接近は、二様である。濱田は、カント研究の第一作である『若きカントの思想形成』以下『形成』においては、批判前期以前の若きカントの思想形成に注目する。濱田は、カントの思想形成の「思想的

連関の究明」を企図し、「若きカントの中にドイツ、イギリス、フランスの先行または同時代のすぐれた思想成果が流れこんでいる」としたうえで、カント四二歳（一七六六年）までの思想形成にイギリス道徳哲学が及ぼした影響を考察する。最初期のカントにとって、イギリス、フランスの諸思想はほとんどすべてが先行成果であり、「他の思想家たちとの親交と格闘の中で自己形成を遂行」したと濱田は断じる。さらに濱田は、カントが「自らをドイツの現実の惨めさに縛られる小市民」であると同時に「自由な普遍的世界市民」であると自覚していたとし、その自覚が「学者としての一面性抽象性のレベルにとどまって、現実的市民的活動と引き裂かれなければならなかった」と指摘する。カントとドイツ観念論は「現実における達成が困難であれば

あるだけ、観念の領域における追求は熱烈となり、啓蒙の徹底した理論化とさらにその批判をめざした」と濱田は見るのである。

濱田が『形成』において取り上げる主なイギリスの道徳哲学者ないしモラリストたちとは、シャフツベリ、ハチソン、ヒュームらである。それらに濱田はそれぞれほぼ十ページにわたり言及している。なお、ホッブズには一ページの言及のみで、マンデヴィルにはふれていない。イギリス道徳哲学者たちは「感情面における現実的人間の探究」に励むが、その「心理的方法」には学ぶべきものがあると濱田は見る。

『美と崇高との感情に関する考察』（一七六四年、以下『美と崇高』）において、カントは、「哲学者の目よりもむしろ観察者の目」をもって事柄の把握をしていた。ここに濱田は、カントの自己形成の重要な契機を確認する。すなわち、カントにおいては「一層近代社会と人間の像がイデオールなものとして理論的完璧さを獲得する方向に向かって形成され、それによって現実の市民社会とその人間をも批判しえ、突破しうるものになること」を指すのである。さらに濱田は、カントがイギリスの道徳哲学は「未完成で欠陥はあるが、すべての道徳性の第一根拠の探求の点で最も進んでいる」とみたとする。

第二作『カント倫理学の成立』（以下『成立』）において

は、濱田は一七六〇年代のカントの倫理学の成立過程の解明につとめた。「カント倫理学の形成が決して孤立した営為ではなく・・・共通する時代の普遍的思想課題と積極的に取り組む中で行われた」として、濱田はカントが「独自の解決に向かった」とする。さらに濱田は、カント倫理学が「共通する時代の普遍的思想課題」に取り組むものとして、イギリス道徳哲学に接近したとする。濱田は、六〇年代に至ってカントが倫理学にかんする自己の視点を確立し、もはや青年時代のごとくイギリス道徳哲学を先行するすぐれた思想成果とみることなく、「共通する時代の普遍的思想課題」に取り組むものともなるようになったとする。

倫理学の形成に注目する『成立』において、濱田は紙数の約半分をカントとイギリス道徳哲学との直接の思想的交渉の検討にあてる。また全体の四分の一をカントとルソーとの交渉にあてる。濱田のイギリス道徳哲学への関心の披瀝はここにある。ここで濱田は、カントが「イギリスの道徳哲学者たち、シャフツベリ、ハチソン、マンデヴィルらから批判的に学び」、彼らが「スミス思想の発展に大いに貢献した」ゆえに、カントとスミスとは「時代の共通の思想的影響の下に自己の思想形成を遂行した」という見解の説明にかなりの紙数をさいている。約三〇〇ページの本書において、ハチソンには一〇一ページにわたり言及し、スミスには六八ページ、シャフツベリには四五ページ、マンデ

ヴィルには二八ページ、ホッブズには二四ページにわたりふれている。ヒュームへの言及は十四ページにとどまる。

主論文において濱田はイギリス道徳哲学をより精密な学説的立場によって整理し、ホッブズからマンデヴィルへ進む流れとシャフツベリからハチソンへ進む流れ、すなわち利己心と利他心、自愛心と仁愛、道徳的感情にふれている。加えて、『美と崇高』が「観察者の目」の視点を重視し「イギリス道徳哲学との親近性」をもつことを濱田は指摘する。さらに補論において、同時代人カントとスマイスとが示す「公平なる注視者」の概念の比較を扱っている。

第三作の『カント哲学の諸相』（以下『諸相』）においても、第二作の『成立』の接近は継承され、濱田は、カントとイギリス道徳哲学とが「共通する時代の普遍的思想課題」に取り組むものとしている。

『諸相』において濱田は、「アダム・スマイスとイマヌエル・カントー「公平な注視者」と「実践理性」——と題する章を設け、スマイスとカントについて倫理学の見地からの比較考察を試みる。カントはスマイスへの敬重をもち、ドイツ通俗哲学者たちが拠ったイギリス経験論哲学から重要な影響を受けており、そしてスマイスとカントとは、ハチソンとマンデヴィルの総合という点でも、またルソーからの影響という点でも思想上近しい立場にあると濱田は指摘する。そして濱田は、「カント倫理学は、スマイス倫理思想の理論的

純化・徹底の一つの極致」であるとみる。

## 二

周知のごとく、カントの思想形成に関しては、当時その下で学んだボロウスキーの証言が参照される。曰く、カントは道徳の領域でハチソンを、哲学研究においてはヒュームを重視し、特にヒュームの思想的刺戟によって、飛躍的發展を遂げたとされる。またこの証言は、时期的にはほぼ等しいヘルダーの、カントは講義において「ライプニッツ・・・ヒュームを検討し、ケプラー、ニュートンその他の物理学者の自然法則を追究した」という回想によって裏書きされる。後年のカントの『プロレゴメナ』の中で、ヒュームがかれの「独断のまどろみを破り、思弁的哲学の分野における私の研究に、全く別の方向を与えた」という文言から、カントはいつ、いかにして、ヒュームの教説にふれたか、そしてなにを知ったのかという疑問が投げかけられてきた。

ヒュームの後年の著書である『人間知性研究』と『道徳原理研究』は、イギリス本国における出版からまもなくドイツ語訳が出版され、それらがカントの蔵書にもあったことは事実である。しかし両研究は、処女作『人性論』での不評を憂慮したヒュームが因果の問題等の哲学的問題を省

いて書き改めたものであり、後世からは哲学上の価値を疑われる著作である。他方『人性論』は、ヒュームの生前に再版されることなく、ドイツ語訳がイギリス本国における再版よりもかなり早い一七九〇年に出版された。イギリスにおける再版は一八一七年であり、編集を加えた版は一八七四年まで出なかった。また、カントは英語の知識がなく、翻訳されたものを利用したと云われている。したがって、カントとヒュームとに緻密な考察をくわえたケンプ・スマスは、カントは「かれ独自の仕方」でヒュームの思想をとらえたと主張する。

なおカントは『プロレゴメナ』において、ヒュームの反対者たち、リード、オズワルド、ビーティ、ブリーストリーらがヒュームの説を見落としたとも指摘している。この中で、リードの著書がもつとも早く一七六四年に公刊され、フランス語訳は一七六八年に出され、ドイツ語訳も一七八二年に出版されている。ビーティのヒューム攻撃はイギリスでは一七七〇年に出され、ドイツ語訳は一七七二年である。上記四名の最後のブリーストリが、一七七四年に他の三名に就いての論評を著している。したがって、一七五〇年頃からドイツにおいてイギリスの思想著作が大量に流通したとはいえ、カントが上記四名の対ヒューム批判の要旨を知りうるのはブリーストリの著作をなんらかの仕方を知ったからであるとみるのが適切である。

また『プロレゴメナ』において、カントはヒュームの『自然宗教にかんする対話』(以下『対話』)にふれている。同著はヒュームの死後、原稿を委ねられた遺言執行人アダム・スマス、出版者ストラハン、同名の甥ヒュームが危険を感じて執行を互いに押しつけあつたあげくに、同名の甥が一七七九年に上梓したものである。ドイツ語訳は一七八一年に出版された。しかも『対話』は、執拗な攻撃を警戒したヒュームが対話の形式により、自説を可能なかぎり不透明に呈示したものであり、どの発言者がヒュームの真意を伝えるものであるかいまなお議論が続くものである。したがって、カントが何らかのヒュームの著作を直接に読み、その思想の主旨を捉えて、その後の批判哲学の発展に役立てたということとは不可能である。また、前述のケンプ・スマスは、七二年のビーティのヒューム攻撃の書が『人性論』の直接の引用を含むことから、カントに批判哲学の中心問題を考察する契機を与えたのはビーティではないかという示唆をする。しかし、ケンプ・スマス自身、一七八三年のメンデルスゾーン、ガルベ宛書信の、『純粹理性批判』が「少なくとも十二年間」の成果であるというカントの周知の言葉を引き、遅くとも一七六九年がカントにおける批判哲学へむけての思索の起点であることを承認するゆえ、ビーティ説を支持する気はないと思われる。

要するに、カントがヒュームの著作をその主要な思想の

確立にあたって直接に参照したことはないということだけが確實であると報告者は考える。

現代英米の哲学界においてヒューム研究は盛んであるが、十九世紀においてはヒュームが主要な哲学的関心の対象として取り上げられなかったことは忘れられている。そのヒュームを哲学的関心の対象に復活させたのが前述のケンプ・スミスの約一〇〇年まえの業績である。『純粹理性批判』を英語訳し、『コメンタリ』も著しているケンプ・スミスは、その後自己のヒューム研究を大成したおり、ヒュームの「理性は情念の奴隷であり、ただ奴隷であるべきである」という主張がその哲学の核心を示すことを再認識したと述べている。ケンプ・スミスによれば、ヒュームは道徳の門をつうじて哲学にはいった。それゆえハチソンのヒュームへの影響の大きさを改めて確認しなければならぬ。ヒュームの『人性論』は、ハチソンの感化の大である道徳にかかわる第二・三編が先行して著され、因果の問題等を扱う第一編は後の執筆である。ケンプ・スミスは、ヒュームのいう「思考の新情景」とは、ハチソンの主要な著作である『情念感情論』や『美と徳の観念』が提起する人間観、世界観をさすものであると指摘している。ここで、ヒュームへのハチソンの影響について詳細に示すことは控えるが、ケンプ・スミスの指摘は近年のヒューム研究では基本的に支持されるものである。

そうであれば、ボロウスキーの証言は真実を伝えるものであると考えられる。すなわち、カントはハチソンを精読することによって、ヒュームを捉えたとみることが可能である。因果の問題等狭義の哲学的問題に取り組む『人性論』第一編は、ハチソンに学び道徳にかかわる問題を追究して第二・三編をまとめた後のヒュームによって完成された。

同様に、カントがハチソンに道徳の問題を学び、さらに狭義の哲学的問題に目をむけたとき、それだけにおいては十分であるヒュームの『人間知性研究』も、カントにとってはきわめて重大な知的刺戟であり示唆をあたえる「深い哲学的研究において特に重視」すべきものとなった。カントが一七六二年には両者のドイツ語訳を蔵書として精読することができた事実から、この報告者の推測はけっして不合理ではないと思われる。いわば、カントにとってヒュームはハチソン門下の兄弟子であり、その兄弟子の技を背後から覗きみて暗示をうけ、そのことをカント独自の仕方であらうに誠実に表現したのが上の言葉であるといえよう。

### 三

ここで一度濱田から離れてイギリスの道徳哲学の展開を、報告者なりの可能なかぎりの理解の範囲で整理してみたい。一般にイギリス道徳哲学者ないしイギリスのモラリスト

たちとは、一六五〇年から一八〇〇年にいたる時期の思想家をさす。数人の異同はあつても『イギリスのモラリストたち』の抜粋集の編者たちはホップズからペンタムまでを入れる。同一の題の評論においてペーコンからコールリッジまでを含める例もあるが、道徳哲学と限定したときにはホップズからペンタムまでをさす。

十八世紀初期にいたるまでのイギリス道徳哲学の主要な関心が、前世紀後半の『市民論』、『人間論』、『物体論』の順で発表されたホップズ説の克服にあつたことは事実である。そもそもイギリス道徳哲学の関心は初めから倫理思想にかぎらず、「現実の市民社会とその人間」にあつたことを忘れてはならない。当時のマンデヴィルへの関心は現実の社会にある人間の利己心を取りあつかうものとしてであつた。ヒュームへの関心も同様である。ヒュームは『人性論』において、初め道徳的区別は道徳感から来るとしたが、やがて共感その源泉であると改める。『人性論』を書き改めた後の『道徳原理研究』においても、共感は考察されている。ヒュームは終生哲学的著作を続けるが、一般に『イングラント史』、『道徳政治論集』の筆者として著名となる。

十八世紀の中葉にいたり、産業の発達につれて国制、経済、社会、そして具体的幸福の在りかたに目をむける政治的社会的考察が道徳哲学の主要問題となつていった。その中核は、ブラックストーン、スミス、ペンタムらである。

その中で人間の幸福を考える功利主義が徐々に出現したのである。ただし、功利主義としてはペンタムより先にペイリラの神学者のそれが主流となつた。

また、イギリスにおいて政治的社会的考察が緊急かつ必要であつたことを忘れてはならない。あるべき政治社会像の追究は一六四〇年代からの課題であつたが、八八年のオレンジ公の王位継承以来、イギリス全体がヨーロッパとの密接な交渉をもつにいたつたことから、国内の議論は白熱した。ヒューム、スミスの母国であるスコットランドは一層複雑な事情に直面せざるをえなくなつた。十七世紀初め以来の同君並立は、異なる新教をその国教とする二国の統合を現実とした。よつて強大富裕なイングランドと統合する弱小貧困なスコットランドは民族の存亡を危惧せざるをえず、しかも国内に中世封建制の残る高地地方と開化した低地地方をかかえ、国内の融和は絶望的な難問であつた。ヒュームそしてスミスにおける「現実の市民社会とその人間」という問題との取り組みは、このような二重三重の難題の下にあつたのである。ここに一七四五年のジャコバイト反乱の動揺を克服したスコットランド出身者の実用・実利を重視する論説が注目を集める。アダム・スミスもまさに、ヒュームと同じ思想課題に取り組んだのである。スミスが『道徳感情論』の完成の後、グラスゴウ大学の法学教授となり、『法学講義』さらに『諸国民の富』へ進む所以で

ある。

他方、十八世紀の中葉のイギリス道徳哲学においては、シャフツベリからハチソンに至る利他心を重要とみる流れは主要な位置から外れる。「感情面における現実的人間の探究」であつても、「現実の市民社会」から隔絶した人間を考察するとみられるからである。理想的高尚的なシャフツベリそしてハチソンはイギリスにおいて急速に忘れられる。ハチソンが主要な著作を出版し、ヒュームに「思想の新情景」を示したのは二〇年代の終わりの時期であり、五〇年代の道徳哲学にはもはや影響をもたない。ただ、ハチソンは「最大多数の最大幸福」を思いついたことによつて記憶される。イギリスにおいてシャフツベリへの興味が復興するのは、現実社会にかんする騒がしい議論がうとまれ審美的ロマン的思想が求められた十九世紀の初めであり、ドイツのシャフツベリであるカントもコールリッジによつて注目されるのである。

イギリス道徳哲学におけるスコットランド学派の影響力は長続きしない。十八世紀後半のイギリス全体がアメリカ独立、対フランス戦争等の大きな試練に直面するからである。大ブリテン国が成立しようとし、単なる実用の重視ではなく、「現実の市民社会とその人間」の根本を問いなおす大きな構想力が求められたからに他ならない。ここに巨人ベンタムの法・政治にまたがる功利主義思想が大きな影響

力をもつ。スミスが最晩年に『道徳感情論』を改訂したのは、もう一方の行き過ぎ、いわば人間論の欠如、「現実の市民社会」への関心の行き過ぎを批判するものである。

#### 四

このようにイギリス道徳哲学を整理すると、カントの捉えるイギリス道徳哲学の展開は、あくまでカントおよびドイツの思想界による一七五〇年から七〇年にかけての翻訳紹介によつて、イギリス道徳哲学を整理理解したものであることは確実であると報告者は考える。決してそれを不合理とすることは出来ない。しかしながら、イギリスにおける哲学思想の展開を精確に反映していないことは事実である。

濱田は『成立』、『諸相』において、スミスとカントが「共通する時代の普遍的課題」に取り組み、「時代の共通の思想的影響の下に自己の思想形成を遂行した」とする。両者はともに、ハチソンとマンデヴィルを総合し、ルソーの影響の下にあるという類縁関係を濱田は指摘する。しかしながら、ドイツにハチソン、マンデヴィルが翻訳紹介されたのが一七六〇年頃であつても、イギリスにおいてハチソン、マンデヴィルは二〇年代後半の出版である。「共通」という表現を「時代」、「思想」のいずれに用いることも容易では

ないのである。しかし、ハチソン、マンデヴィルを現実の「時代」、「思想」ととらえるドイツの現実があった。

また濱田によれば、ドイツ通俗哲学者は「ロック、ハチソン、フアーガソン、ヘンリ・ヒューム、デイヴィッド・ヒュームらを次々に熱心に翻訳紹介し」、また「シャフツベリやD・ヒュームのドイツ語訳」をしたというが、これらをそれぞれ一揃いの組合わせとみなすことはできない。しかし、通俗哲学者やカントがこれを一揃いとみるのであればそれはそれでひとつの見識である。濱田のイギリス道徳哲学の理解がカントの理解を踏襲するものであることは確実である。

先にふれたように、殊にハチソンはヒュームの後にドイツに翻訳され紹介された。そのために逆転してヒュームへの批判として受け取られたことは、その後のドイツないし少なくともカントの思想の展開におおきな意味をもつ。すなわち、カントにおいて「観念の領域における追求は熱烈となり、啓蒙の徹底した理論化、さらにその批判がめざされ」たものであり、まさに「独自の解決に向かった」ものとなる。

しかしながら、カントのイギリス道徳哲学への関心に対する濱田の追究は、カントにおける哲学の意味、すなわち「哲学は人生の究極目的を問うものであり、人生に役立ち人生を導くためのものであること」を示している。カントに

において、イギリスのモラリストたちはかかる導き手であった。そして、濱田はかかるカントを示すことによつて、われわれの導き手であった。スマスはハチソンに「決して忘れえぬハチソン先生」と呼びかけた。スマスにとつて、ハチソンは学問の師である以上に、人生の師であつたゆえである。今報告者もスマスにならい「決して忘れえぬ濱田先生」と呼びたい。

なお、濱田先生には報告者が二五年前スコットランド留学から帰国したおり、カント (Cant) 姓はスコットランド東岸中部のアンガス州に現存する姓で、また十六、十七世紀には同地方の出身者をふくめ、多くのスコット人が現在のロシア、ドイツ、バルト海地方に傭兵稼ぎに渡つたことを申し上げたと記憶する。『諸相』において先生は、カントの出自がリトアニア近辺という新説を紹介されている。

その「新説」では、祖父の二人の姉妹がスコット人と結婚したことも単なる偶然とされている。しかし、祖先がスコットランド出身であるゆえに、同郷人がその家に入入りし、結婚にいたつた可能性は高い。

さらに、カントの気質は有力な状況証拠となろう。「合理的思考と勤儉力行」は古くからスコット人の気質を表すのによくひかれる言葉であるが、それはまさに、カントの気質を表すものである。カントのうちに秘められた気質は、祖先のスコットランド気質を受け継いだものといえよう。

また、カントは「扁平で狭い胸」をもつと言われるが、骨張った顔つきとやせぎすの体格はスコットランド低地地方の人に共通する外見と言われるものである。同じ低地地方出身のヒュームも、自分は青年時代には、丈の高い、痩せた、骨の突き出た体型であったと述べている。カントがスコットランド低地地方の町を歩いても、人はなんの奇異な印象をもたなかったと考えられる。客観的な証拠はないとしても、カントの祖先の土地がスコットランドにあったことは確かであると報告者には思われる。

またアダム・スミスの出生地は、同地方とテイ湾でへだてられた対岸ファイフ州である。そこは、カント祖先の故地(?)から南西に約五〇キロメートル離れるにすぎない。さらに、スミスの父はアングラス州の北隣のアバディーン州の出身であり、母がファイフ州の生まれである。カントとスミスには同じで、しかも近いスコットランドの血が流れているということがありうるのである。